

政策対話（教育委員会・県民文化部）の概要

1 テーマ

学校へ行くことが難しい子どもたちへの学びの支援について

2 実施概要

(1) 日時

令和元年8月3日（土）10時～12時

(2) 場所

県立長野図書館3階 信州・学び創造ラボ

(3) 参加者

21名（学校関係者、フリースクール関係者、不登校支援団体関係者、子ども支援団体関係者、関心のある一般県民）

県側：教育長、教育次長、心の支援課長

県民文化部長、こども・若者担当部長、次世代サポート課長、
児童相談・養育支援室長

3 寄せられたご意見

区分	意見
不登校に対する考え方	<ul style="list-style-type: none">○ 子どもたちの状況、家族の状況、社会の状況が変わってきていることを、皆が認識することが必要。○ 不登校児童の休養の必要性、不登校は問題行動ではないということを前面に出し、学校を変えていくことが重要。○ 現場の先生も保護者も学校へ行くことは当然のことだという思いがある。子どもたちに「無理しなくていいよ。」と言えることが大事。○ 本人も保護者も含めて「学校へ行くのが当たり前」という不登校への偏見や差別の目で見える社会環境も問題にして考えていかないといけない。○ 子どもたちの個性を大事にするという考え方を、地域も学校も持っている社会に変えていくことが大事。○ 官民共同で一緒に不登校の心を理解することを学べる仕組みが必要。○ 学校教育の変化も必要だが、多様な価値観で生きられるという社会設計の変化も必要。○ 学校で国連「子どもの権利条約」を皆が学び合えることからスタートして欲しい。○ 不登校は子どものSOS。自立とは自分一人で立つではなく倒れそうな時に支えてくれる人がいること。自信をつけさせることが大事。○ 不登校の実態を長野県独自に調査できないか。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">子ども・家庭への理解と切れ目のない支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当事者・元当事者たちの声を聴き、不登校となった理由をきちんと把握することがとても大切。 ○ 学校との関わりで傷つく子どもや保護者がいる。学びの支援の前に、本人と家族の心の理解と、心のケアが必要。 ○ 不登校や発達特性のある子どもたちを、小中高とつなげてフォローしていく仕組みが弱い。特に高校生の居場所が必要。 ○ 不登校の子どもたちが、フリースペースや中間教室とつながった時点で、学校との連携をしっかりと取るべき。 ○ 低年齢からの支援や連続性のある支援をワンストップで受けられる、より身近な相談先の整備がとても大事。 ○ 不登校の子どもたちがこの社会でどういう生き方ができるのかという将来設計も含めて考えていかなければいけない。 ○ タブレットの使用でやる気が出た子どもに使用を認めるといった、学校での「合理的な配慮」も必要。 ○ 「学校に子どもを合わせる」のではなく「ひとりひとりの子どもに合わせる学校づくり」が必要。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">中間教室のあり方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校復帰が前提になっている。児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すということに変わって欲しい。 ○ 中間教室の意識改革、学校との連携や学習の評価ができる仕組みが必要。 ○ 中間教室は通過施設であり、その子どもに沿った学びの場であるべき。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">学校以外の学びの場の必要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一番問題なのは学校が中心ということ。本来は子どもたちが中心で、子どもたちが学びの場を選択できることではないか。 ○ 金銭的な問題からフリースクール等に通えない現状について、行政との話し合いの場が必要。 ○ 多様な生き方の人がいる社会においては、学校だけではない学びの場が増えていくことが大切。 ○ 学習支援だけが学びの場ではなく、充電をする、時間をかけて子どものエネルギーを蓄えるのも学びの場。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">高校入試・新しい高校づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保護者は、評価がつかないことによる公立高校入試への影響をととても心配している。 ○ 不登校傾向の生徒や、学校生活に困難を抱える生徒に対して、新しい入試制度でサポートされるということを示して欲しい。 ○ 学び直し・自分と他人への信頼の回復・社会的自立に必要な技能習得ができる県立高校を創って欲しい。 ○ さまざまな困難を有する子どもたちに、学費の心配をせずに学び直しの機会を提供することが、公立の学校の義務ではないか。